

世界文学全集

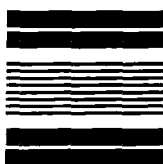
16

ゾラ
ナナ
クロードの告白

山田 稔 訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第16巻

ゾラ ナナ クロードの告白

昭和 42 年 3 月 15 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日3版発行

訳 者 山 田 稔

装幀者 亀 倉 雄 策

発行者 中 島 隆 之

印刷者 澤 村 嘉 一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 750 円

製 本・和田製本工業株式会社

製 函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目次

ゾラ

ナ	ナ	クロードの告白	年表	解説	ルーゴン・マッカール家系樹
.....					
3		275	369	377	366

巻頭口絵 ゾラの肖像 マネ筆

本文カラーさし絵

フランチーシェク・トーレック

柳瀬俊雄

© 1967

装 幀 亀倉雄策

ナ

ナ

主要人物

ナナ 正式の名はアンナ・クーボー。『居酒屋』のなかのジュルヴェーズとクーボーとの間に一八五二年に生まれる。飲酒の遺伝による性的交感を示す。その性的魅力により、ヴァリエテ座の女優として売出し、やがて娼婦として豪勢な生活を送り、男たちをつぎつぎと破滅させる。最後に中近東へ出奔し、天然痘で無惨な死をとげる。

ミュファ ナボレオン三世の宮廷に仕える伯爵。禁欲的性格。ナナの魅力と宗教の板ばさみとなって苦しみ、辞職する。

サビーヌ ミュファの妻。夫への性的不満から浮気を重ねる。フォシュリーを愛人とする。

エステル ミュファの娘。ダグネとの結婚後は、夫を完全に支配する。

ダグネ もとナナの愛人。遺産を食いつぶし、持参金目あてに瘦せたエステルと結婚。

ローズ・ミニョン はじめはヴァリエテ座のスター。ナナのライバル。シュタイネル、ついでフォシュリーを愛人とする。

ミニョン ローズの夫。妻を男にとりもつ。

サタン 売笑婦。ナナと同性愛におちいる。

シュタイネル ユダヤ系ドイツ人の銀行家。ナナのために破産。

ヴァンドウーヴル 名門貴族。ナナの愛人。ニヒルな性格。競馬で失敗し、焼身自殺をとげる。

ラボルデット 娼婦たちの面倒をみてやる青年。ただし女とは寝ない。

ユゴン兄弟 兄フィリップは軍人。ナナのために公金を横領する。弟のジョルジュは十七歳。ナナのために自殺。

ヴノー ミュファ伯爵の宗教上の指導者。陰険な人柄。

1

九時になってもヴァリエテ座の場内はまだがらんとしていた。灯を小さくしたシャンデリヤに照らされたバルコニー席やオーケストラ席、その暗紅色のピロイド張りの肘掛椅子のあいだに、数人の客がひっそりと開幕を待つばかりだ。大きな赤い幕は影に没していた。フットライトはまだつかず、楽士の譜面台は散らばったままで、舞台からは物音ひとつきこえない。だがふり仰ぐと、ガス燈に青く染められた天空を裸女や子供がかめぐる円天井のあたり、いわゆる天井敷敷では、たえまないざわめきのなかから呼び声や笑い声がとびだし、ボンネットやハンチングが金枠の大きな円窓のしたに重なり合っている。ときおり、案内係が切符の千切れを手に、一組の男女をうしろから押してせかせか入ってくる。二人は着席する。男は燕尾服、女はほっそりした上体をしゃんとおぼし、ゆっくりと場内をながめる。

二人の青年がオーケストラ席にあらわれた。しばらく立ちどまって場内を見まわす。

「どうだ、エクツール、いったとおりでらう？」年上のがいう。黒いち

よばひげをはやした大柄な青年だ。「早すぎたよ。葉巻を吸いおわる時間はあつたぜ」

案内係が通りかかる。

「おや、フォッシュリーさん」と親しげに声をかけて、「まだ半時間は始まりませんよ」

「じゃあ、なぜ九時開幕なんてピラに書くんだ」瘦せた長顔をしかめてエクツールがつぶやく。「今朝も、この芝居に出るクラリスなんかは、八時ちょうどに始まるっていったぜ」

しばらく二人は黙りこみ、顔を上げて敷敷の暗がりをさぐった。だが緑色の壁紙のため、そこはいっそう暗く見える。一階敷敷席はまったくの闇だ。バルコニー席には、一人の太った婦人がピロイドの手すりについたりもたれかかっているばかり。高い円柱にはさまれた前敷敷は右も左も空席のままで、長い縁飾りのついた垂れ幕だけを見せている。白と金にうす緑をあしらった場内は、シャンデリヤの弱い光のもと、ぼうつとかすんで見える。こまかな埃が立ちこめたように。

「リュシーの前敷敷は取れたかい？」エクツールがたずねる。

「うん、でもずいぶん骨が折れたよ……まあ、リュシーが早くきずきる心配はないさ、あいつのことだから」

彼はちよつとあくびを噛みこらし、しばらく黙りこんでから、

「きみは運がいいよ、まだ初日ってものを見たことがないんだからね……『金髪のヴィーナス』は今年のビッグ・ニュースになるよ。半年も前から噂にのぼってるんだから。その音楽ってのがふるってるんだ……抜け目のないやつさ、ボルドナーヴって男は。これを万国博覧会のためにとっておいたんだからね」

エクツールは神妙にきいていたが、そこで質問をはさんだ。

「ニュー・フェイスのナナってのがヴィーナスをやるそうだが、きみ

はその女を知ってるのかい？」

「そうら、またはじまった！」フォシユリーは腕をふりあげてきけんだ。「今朝からナナのことでうんざりだよ。二十人以上の人間に会ったが、こっちでもナナ、あっちでもナナ！ 知るもんか！ バリ中の女の子を全部知ってるはずはないじゃないか……ナナってのは、ボルドナウがでっちあげた女なんだ。さぞ立派なものだろうよ！」

彼はしずまった。だが、がらんとした場内、薄暗いシャンデリヤ、ひそひそ声やドアを開け閉めする音にみちた教会のような陰気さ、それが彼をいらだたせた。

「あーあ、退屈だなあ」突然彼はいった。「ぼくは出るよ……下に行けば、たぶんボルドナウが見つかるよ。あいづなら、くわしいことを教えてくれるさ」

大理石を敷きつめた正面ホール、そこに木戸口が設けられてあって、観客が姿を見せはじめていた。開け放された三つの柵戸から、活気にみちた生の流れが見える。四月の美しい夜空のもと、大通りはうごめき、燃え立っているのだ。車輪の音が急にとまり、扉がぱたんとしめる。と、客が二、三人ずつかたまつて入ってくる。そして木戸口の前で立ちどまり、正面の左右ふたつの階段をのぼってゆく。階段のところでは女たちは上体をぐらつかせて少しおくれる。帝政時代ふうの貧相な装飾のため張子の柱廊のように見えるこのホール、そのむき出しの青白い壁に、ガス燈のどぎつい光をあびて大きな黄色いピラがべたべたとほってある。黒々と大きく書かれたナナの名前。通りがかりに、ふと引きとめられたようにピラを読んでいる男。入口をふさいで立ち話をしているもの。切符売場のそばでは、刺りたてのはば広い顔をしたたくましい体格の男が、席をとうとうとがんばっている人々に荒っぽく応対している。

「あそこにボルドナウがいる」階段を降りながらフォシユリーがいった。

だが支配人のほうが先に気づいて遠くから声をかけた。

「おい、きみはなかなか親切だな！ あれで記事を書いてくれたつもりかね……今朝『フィガロ』紙を開けてみたが、何もないじゃないか」「まあ待ちなさいよ！ ナナのことを書くには、まずその女を知る必要がある……それに、約束したわけじゃないし」

そこで話を打ち切って彼は従弟を紹介した。エクートル・ド・ラ・フロワーズ、バリに教育の仕上げにやってきた青年だ。支配人は、ちらりとひと目で青年を値ぶみした。エクートルのほうは感動の面持ちで相手をじろじろながめている。これがあのボルドナウなのか。女を畜生扱いする興行師。いつも広告のことで頭から湯気を立てている男、どなりちらし、つばを吐き、膝をたたき、シニクで、憲兵みたいに気むずかしいあの男なのか！ 何かお世辞をいわねばならぬ、とエクートルは思った。

「あなたの劇場は……」彼はやさしい澄んだ声で言いかけた。

ボルドナウは、いかにもあけすけな人間らしく、露骨な言葉で平然とさえぎった。

「いや、女郎屋ですよ」

フォシユリーがそうだといわんばかりに笑う。ラ・フロワーズはあつげにとられ、お世辞のどにつかえたまま、それでもいかにもわかったような顔をした。支配人はすでにある劇評家のところにとんで行って、握手をしている。彼の筆は大きな影響力をもっているのだ。支配人のもとで来たとき、ラ・フロワーズは落着きをとりもどしていた。あまりうろたえていると田舎者扱いされる。なんとかうまいお世辞をいってやろうと思つて、

「噂によるとナナはとろけるような声をしているそうですね」

「あの女が！」支配人は肩をすくめて、「がらがら声だよ！」

青年があわててつけ加える。

「それに、すぐれた俳優だそうで」

「あれが！……大根さ！ 芝居のシの字も知りやしない」

ラ・ファロワーズはちょっと赤くなった。何のことやらわからな

い。しどろもどろに、

「ばく、今夜の初日だけは絶対に見逃がしなかったんです。知っ

てたんですよ、あなたの劇場が……」

「女郎屋」ボルドナウがまたささげる。いかにも頑固で確信にみち

た人間らしい。

フォシュリーは落着きはらって、入ってくる女たちをながめてい

た。従弟が、笑っていいのやら怒っていいのやらわからず、ぼかんと

口をあけているのを見ると、救いの手をさしのべた。

「まあ、ボルドナウの気の入るように、劇場のことは注文どおりに

呼んでやれよ。そのほうがうれしんだ……ところできみ、ぼくたち

を煙にまくなよ。もしナナが歌も芝居もだめなら、きみは失敗する、

それだけのことさ。じつはぼくもそれが心配なんだ」

「失敗、失敗だって？」支配人は真赤になった。「女に芝居や歌が必

要かね？ きみも実際バカだな……ナナにはほかのものがある、これ

だけは絶対というものがね。嗅いでみた。ぶうんと匂う。間違ってた

らこの鼻もおしまいさ……まあ見てくれ。あれが舞台に現われただ

けで満場ごくりと生唾をのむから」

持ちあげているごつい手が興奮でふるえている。はっと一息つく

声をおとし、ぶつぶつひとりごとを言いはじめた。

「うむ、あいつはいける！ そうだ、相応いけるぞ……売女めが！

売女めが！」

やがて彼は、フォシュリーのもとめに応じてくわしい話をきかせて

やった。その露骨な言葉に、エクトール・ド・ラ・ファロワーズは面

くらった。——自分は以前からナナを知っていて、売り出したいと思

っていた。ちょうどヴィーナス役の女がいるようになった。おれとい

う人間は、一人の女を長らく手がけるようなことはしない。すぐに客

に提供するってのが自分の流儀だ。ところが困ったことに、この娘が

やってくると、小屋のなかは上を下への大騒ぎ。一座のスターのロー

ズ・ミニョン、これは芝居も歌もうまい女だが、ライバルの出現に腹

を立て、出てゆくといつて毎日おどかす。宣伝のことでまた一騒

動。ちくしょう！ 結局、二人の女優の名を同じ大きな字で出すこ

とにきめた。おれは、つべこべ言われるのがきらいなんだ。シモーヌ

であれクラリスであれ、いわゆる娘どもがおとなしくいうことをきか

ぬときは、尻を蹴つとばしてやるんだ。そうでもしなけりや、生きて

はゆけん。おれは売るんだ。値打ちはわかっている！ 淫売め！

「おや」ふと言葉をとぎらせて、「ミニョンとシュタイネルだ。相変

らずおそろいで。知ってるだろうが、シュタイネルはローズが鼻につ

きはじめたんだ。で、亭主は彼が逃げださぬよう、つきつきりという

わけさ」

劇場の軒蛇腹に一列に燃えるガスの照明が、歩道にあかあかと光を

投げている。あざやかな緑を浮きあがらせている二本の小さな木。つ

よい光をあびて白くかがやく円柱、そこにはられたピラが、真昼のよ

うに遠くからも読みとれる。そのむこう、大通りの深い闇には、点々

と街燈がともり、群衆が波のように流れつづけている。多くの男たち

はすぐには入場せず、ゆっくりと葉巻をすいながら外で話をしてい

る。ガス燈に青白く染まったその姿、アスファルトに落ちている短か

な黒い影。縁日で見かける怪力家のような角ばった顔の巨漢ミニオンが、人の群を押しわけてやってきた。その腕に引きずられるようにしているのは銀行家のシュタイネル。これはまったくの小男だ。すでに吐っばっている下腹、ごま塩のひげにとり囲まれた丸い顔。

「そうそう」ボルドナールが銀行家にいった。「あんたはきのう、ぼくの部屋であの娘に会ったんでしたな」

「あれがそうか！ そうだろうと思ったよ。でも、あの娘が入ってきたとき、ぼくは出るところだったから、ちらっと見ただけだよ」

ミニオンは、大きなダイヤの指輪をいらいに気にまわしながら、眼を伏せて話をかたむけている。ナナのことだとわかっていのだ。ボルドナールがこの初舞台の女を紹介していくにつれ、銀行家の眼があやしく光りはじめるのを見て、ミニオンはたまりかねて口をはさんだ。

「ほうっておきなさい、あんな淫売のことなんか！ 観客がちゃんと片をつけてくれますよ……ねえ、シュタイネルさん、家内が機軸で待ってるんですぜ」

彼はシュタイネルを連れてゆこうとした。が、シュタイネルはボルドナールのそばを離れようとしなない。目の前の木戸口では行列がみだれ、騒ぎが生じていた。そのなかで、ナナという短い音がはずむようにひびいている。ピラの前に突立って、ゆっくりとその名を声に出してみるもの。通りすがりに、問いただすような口調で呼んでみるもの。女たちは好奇の微笑をうかべ、おどろいた様子でその名をしずかにくりかえす。だれもナナを知らない。ナナなんてどこから降ってきたのか？ いろんなゴシップが流れ、耳から耳へと冗談がささやかれる。この名はまさに一個の愛撫だ。万人が親しげに口にしているこの名前。「ナナ」と口にする、ただそれだけで群衆の心は浮き立ち、

顔がほころんでくるのだ。好奇心が人々をかりたてる。狂気の発作にも似た、あのはげしいパリの好奇心。ナナをひと目見たい。ある女はドレスのひだ飾りを引きちぎられ、ある男は帽子を紛失した。

「そんなにたずねられちゃ、かなわない」ボルドナールが二十人ほどの客から質問攻めにあっている。「もうすぐ見られますよ……ちよつと失敬、わたしを呼んでるので」

彼は観客をおりたてたことで悦にいつて、姿を消した。ミニオンは肩をすくめ、ローズが第一幕の衣裳を見せようと待っていることを、シュタイネルに思い出させた。

「おい、リュシーだ。ほら、いま馬車から降りる」ラ・ファロワーズがフォッシュリにいう。

なるほどリュシー・ストックワールだ。四十がらみの小柄な醜い女。長すぎる首、やつれ顔、厚い唇。しかし潑刺としていて愛嬌があるので、すごく魅力がある。カロリーヌ・エケとその母親がいつしよだ。カロリーヌはひややかな美貌の持主、母親のほうはもったいぶっている、剣製のような感じをあたえる。

「いつしよにこない？ 席が取ってあるのよ」リュシーがフォッシュリにいう。

「いや、ごめんだね、全然見えないんだから！ ぼくは椅子席がとってあるんだ。オーケストラ席のほうがいいよ」

リュシーは腹を立てた。あたしといつしよのところを見られたくないのかしら？ だが、すぐ機嫌をなおして別の話に移った。

「あんた、ナナを知ってるってどうしていわなかったの？」

「ナナを？ 一度も会ったことないよ」

「ほんと？ あんたが寝たって話聞いたわよ」

そのとき、二人の前に立っていたミニオンが、口に指を当てて黙る

よう合図した。リュシーがたずねると、彼は通りがかった青年を指さしてさきやいた。

「ナナの情夫だ」

みながその青年をながめる。やさ男。フォシユリーはその男を知っている。ダグネだ。女相手に三十万フランの金をつかいはたし、いまは株の仲買などしながら、ときどき女たちに花を買ったり食事をおごったりしている男である。きれいな眼、とリュシーは思った。

「あら、あそこにブランシュがいるわ!」と彼女はさげんだ。「あのひとよ、あんたがナナと寝たっていったのは」

かわいらしい顔を白粉でぬりかためた太った金髪娘、ブランシュ・ド・シヴリーが、りゅうとした身なりの、品のいい、すらっとした男性と連れだってやってきた。

「グザヴィエ・ド・ヴァンドゥール伯爵だ」フォシユリーがラ・ファロワーズの耳もとでささやく。

伯爵が新聞記者と握手をかわすあいだ、ブランシュとリュシーはせきこんで、たがいになにか弁解めいたことをしゃべりはじめた。ひとりには青、ひとりにはバラ色のひだ飾りのいつぱいいたスカートで通路をふさぎながら、彼女たちがナナの名をかん高い声でくり返すので、人々が聞き耳を立てる。ヴァンドゥール伯爵はブランシュを連れ去った。だがいま、ナナの名はふくらんだ期待のうちに、一段と高い調子で正面ホールの隅々にまでひびきわたっていた。まだ始まらないのか? 男たちは懐中時計を引っぱり出す。遅れたものは、馬車のとまらないうちにとび降りる。外でむらがついていた連中も歩道をはなれた。すると人の姿の消えたガス燈の光のなかを、劇場をのぞきこみながら散歩者がゆっくり横切つてゆく。ひとりのいたずらつ児が口笛をふきながらやってきて、入口のピラの前に立つ。そして「いよう!」

「ナナ!」としゃがれ声でさけぶと、尻をふりふり古靴をひきずって立ち去る。どつと笑いがおこる。男たちがたくみにまねてくり返す。「ナナ、いよう! ナナ!」人々がひしめき合い、木戸口では喧嘩まではじまった。ナナを呼び、ナナを求めるさけびが次第に大きくなってゆく。群衆をとらえる、あの狂気じみた荒々しい興奮。

だが、このさわぎよりも一段と高く、開幕を告げるベルが鳴った。「ベルが鳴つたぞ、ベルが鳴つたぞ」ざわめきは大通りにまでひろがる。われ先に入ろうとして、押し合いへし合いがはじまる。木戸番の数がふえる。ミニオンはやつとシユタイネルをつかまえたが、なんとなく落着かぬふうだ。シユタイネルがローズの衣裳を見に行かなかつたからである。第一鈴で、ラ・ファロワーズは開幕におくれまいと、フォシユリーを引きずるようにして群衆をかきわけた。このあわてふためく観客のありさまに、リュシー・ストゥワールは腹を立てた。がさつな連中ね、女性を押しつらして! 彼女はカロリーヌ・エケやその母親といっしょに最後に残った。正面ホールはがらんとしている。外は鳴りやまぬ大通りのどよめき。

「ここの芝居がいつもおもしろいわけでもないのに!」そうくり返しながらリュシーは階段をのぼっていった。

場内にもどると、フォシユリーとラ・ファロワーズは椅子のまえに立つて、ふたたびあたりをながめはじめた。いまでは場内はあかるくかがやいている。高くなったガスの焰がシャンデリヤを燃えあがらせ、黄色やバラ色の光が円天井から平土間にかけて、雨のようにとび散る。うゝいのように波紋をえがく座席の暗紅色のビロード。きらめく金箔、けばけばしい天井の色調、それをやわらげる淡緑の装飾。フットライトがともる。ぱつと幕が照らしだされる。ずっしりした真紅の垂れ幕は、物語のなかの宮殿を思わせる豪華さで、金箔の割れ目か

ら漆喰をのぞかせているまわりのお粗末な壁と対照的だ。はや場内は、暑い。譜面台で楽士たちが楽器の調子を合わせはじめた。フルートのかろやかなふるえ、ホルンのひそやかな溜息、ヴァイオリンの軽快なしらべ、それらが次第に高まるざわめきのなかをとびかう。がやがやと観客が座席に殺到し、押し合いながらつきつぎと席におさまってゆく。廊下はひどい混雑で、どのドアも後を絶たぬ人波をさばききれない。呼びかわす声、衣ずれの音。スカートや帽子の列にまじる燕尾服やフロックコートの黒。そのうちに椅子席は徐々にうずまっていた。白っぽい婦人服の色が浮かびあがる。美しい横顔の頭がうつむいたとたんに、まげの宝石が大きくきらりと光る。ある栈敷では、ちらりとこのぞく肩が白絹のようだ。群衆の押し合うさまを目で追いながら、悠然ともものうげに扇を使っている女もいる。一方、オーケストラ席では、チョッキの前をひろくあけ、ボタンホールにくちなしの花をさした若い男たちが立ち、手袋をはめた指先きでオペラグラスをあちこちに向けている。

いとこ同士の二人の青年は顔見知りを感じた。ミニオンとシュタインベルが一階栈敷に、手首をビロードの手すりにかけて並んでいる。ブランシュ・ド・シヴリーは一階の前栈敷をひとり占めているらしい。だがラ・ファロワーズはだれよりもまず、二列前の椅子席にかけているダグネの様子をさぐった。そばに、どこかの中学を脱け出してきたらしい、せいぜい十七くらいの少年がいて、天使のようなきれいな眼を大きく見開いている。フォシュリーはにやつとした。

「バルコニー席のあの女はだれだい？」突然ラ・ファロワーズがたずねる。「ほら、青い服を着た娘をつれてるだろう」

さし示すほうをみると、コルセットで締めあげた太った女がいる。髪を黄色に染めているが、昔は金髪だったのが白くなったので染めた

のだろう。子供のように小さくちぢらした髪、頬紅をつけたふっくらした丸顔。

「ガガだ」フォシュリーはあっさりと言った。

この名前に相手がとまどったふうなので、さらにつけ加えて、「ガガを知らないのか？……ルイ・フィリップ時代のはじめころ、浮名をながした女だよ。近ごろはどこにでも娘を連れ歩いている」ラ・ファロワーズは娘には一瞥もくれない。ガガの姿に感動して眼がはなせないのだ。まだすぐきれいだ。と思ったが、口に出すのはひかえた。

そのうちに指揮者が弓をあげ、楽士がいつせいに序曲を奏しはじめた。客の入場はいぜんつづき、騒ぎは増すばかりである。いつも顔ぶれのきまつている初日の特別な客たちが、あちこちで親しいもの同士寄り集まり、にこやかに再会の挨拶をかわしている。常連は帽子も取らず、なれなれしく会釈する。そこにはバリがあった。文芸と、財政と、快楽のバリが。多くの新聞記者、何人かの作家、相場師、堅気の女よりも数の多い娼婦。あらゆる才能から成り、あらゆる悪徳にむしばまれたこの異様に雑多な世界——そこではどの顔にもおなじ疲労、おなじ熱狂の色がうかんでいた。フォシュリーは従弟にたずねられて、新聞記者やクラブ仲間の席をおしえてやった。つぎに劇評家の名をいってやる。ひとりひからびた感じのやせた男、意地の悪そうな薄い唇だ。もうひとり人の好きそうな顔の太った男で、となりにいるあどけない娘を、父親のようなやさしい視線で包みながら、その肩にしなだれかかっていた。

ふとフォシュリーは話をとぎらせた。ラ・ファロワーズが正面栈敷に挨拶するのに気づいたからだ。そこでさも意外といった顔で、

「へえ、きみはミュファ・ド・ブーヴィル伯爵を知ってるのかい？」

「もちろん、ずっと前からね。ミューファ家の地所がぼくの家の近くにあったんだ。いまでもよくあそびに行くよ。……伯爵といっしょにいるのは奥さんと、そのお父さんのシュワール侯爵だ」

従兄がおどろいたのに得意になって、彼は熱心に説明しはじめた。

侯爵は参事院議員で、伯爵は最近皇后の侍従に任命されたんだ。フォシュリーはオペラグラスを手に取り、伯爵夫人をながめた。褐色の髪、白い肌、ぼつてりとしたからだ、黒いきれいな眼。

「幕間に紹介してくれよ。伯爵には会ったことがある。でも、あの家の火曜日のパーティーに行きたいんだ」

「しっ！ しっ！ という声が階上の機敷から発せられた。もう序曲は始まっているのに入場者はまだあとを絶たない。遅れてきた者のために、一列の客が全部立ちあがる。開け閉めされる機敷のドアの音。廊下で喧嘩するどら声。話声は止まない。夕暮時の雀の群のさえずりのよう。たいへんな混雑である。いりみだれる頭や腕。腰をおろして

楽な姿勢をとろうとするもの、最後にひと目見たそうと、いつまでも突立っているもの。「すわれ！ すわれ！」平土間の暗い奥からどなった。場内をさつと戦慄が走る。さあいよいよ見られるのだ、一週間も前からバリの心をとらえていた、かの有名なナナが。

まだときおりだみ声が上りはするが、やがて話声はだらだらとすまっていた。そしてこのかすかなささやき、たえだえな溜息のなかで、突如、オーケストラが小さききみな急テンポとなった。ワルツだ。

卑猥な笑いのような下品なリズム。観客がくすぐられて、はやにやにやしはじめる。そのとき、平土間の前列に陣取ったサクラがさかんな拍手をおくった。幕が上がる。

「おや！ リュシーのそばに男がいるぞ」ラ・ファロワーズはおしゃべりをやめない。

彼は右手のバルコニー席をながめていた。前のほうにカロリーヌとリュシーがすわり、奥にはカロリーヌの母親のすまし顔と、美しい金髪をした、非のうちどころのない身なりの大柄な青年の姿がみえる。

「ほら見ろ。男がいるよ」ラ・ファロワーズがしつこくくり返す。

フォシュリーは、やっとオペラグラスをそのほうへ向けた。が、すぐにもどして、

「なんだ、ラボルデットか」と気のない声でつぶやいた。その男がそこにいるのはだれにとつても当然で、取るにたらぬことだといわんばかりに。

うしろで「しっすかに！」とだれかがさけぶ。二人はだまりこんだ。場内はしんとしずまりかえった。オーケストラ席から後方の座席へかけて、熱心に舞台を見上げる顔の波。『金髪のヴィーナス』の第一幕はオリンポスの山の場面である。オリンポスの山といっても張りぼてのものだ。背景は雲。右手にジュピターの王座。まずイリスとガニメードが天使の群をしたがえて登場する。天使たちが神々の会議の座をもうけながらコーラスをはじめる。ふたたびサクラがおきまりの喝采をおくるが、和するものはない。観客は当惑顔で様子をみている。ラ・ファロワーズは、ボルドナーヴのいわゆる娘のひとり、クラリス・ベスニウスに拍手を送った。水色の衣裳、胸には七色の大きな飾り帯。イリスを演じているのだ。

「あの衣裳を着るのに、クラリスは下着を脱いだんだぜ」彼はあたりいきこえるようにフォシュリーにいった。「今朝、いっしょに着付けをしてみたんだが……腋の下と背中のところから下着がのぞくんでね」

場内にかかるいざわめきが生じた。ローズ・ミニオンがディヤヌに扮して登場したのだ。痩せて色が黒く、バリのいたずらっ児のような

変な愛嬌がある。それで身体も容貌も役柄に合っていないが、この人物を茶化したようなおもしろさがある。自分をすててヴィーナスへ走ろうとするマルスをなげく登場のアリヤ、それを彼女ははにかみながら歌った。歌詞は涙の出るほどこっけいだが、みだらな意味が盛りこんであるので観客は興奮した。ローズの夫とシュタイネルは、仲よく並んでうれしそうに笑っている。やがて場内がどっとわき立った。人氣俳優のブリュリエールが將軍姿で登場したのだ。クルチーユのマルスのように、軍帽に大きな羽根飾りをつけ、肩までとどくサーベルを引きずっている。彼はディヤヌにいやがさがしているが、彼女は高くどまっている。で、彼を見張り、復讐することを誓う。この二重唱はおどけたチロル舞曲で終ったが、それをブリュリエールは、いや味たっぷりの声でおもしろおかしく歌った。彼は女にもてる二枚目といったところだが、そのうぬぼれようがこっけいで、得意げに目玉をくるくるまわしてみせたりする。それで方々の機軸から女のかん高い笑い声がおこった。

やがて観客の熱はさめた。退屈な数場がつづく。おろかなジュビターを演ずる老優ボスクが、てっぺんのつぶれたかき冠をかぶって登場し、料理女の給金のことでジュノーと夫婦喧嘩をしたとき、かろうじて観客の顔がほころんだ程度だった。ネプチューン、ブリュトン、ミネルヴァその他の神々の行列にいたっては、芝居全体をぶちこわすおそれさえあった。いらだたしげな不穏なざわめきがしだいに高まる。観客は興味を失い、きよろきよろしはじめた。リュシーはラボルデットといっしょに笑っている。ヴァンドゥーヴル伯爵は、ブランシユのたくましい肩のうしろで首をのばしている。一方、フォシュリーはミューファ夫妻を横目で観察していた。なんのことやらわからないとでもいうような、いかめしい顔の伯爵。夢ごちちに眼を宙にただよわ

せ、ぼんやりほえんでいる夫人。突然、この気づまりな空気のなかに、サクラの拍手が一斉射撃のように鳴りひびいた。目が舞台へむけられる。いよいよナナの登場か？ ナナという女は、一体いつになったら現われるのか。

だが、現われたのは、ガニメードとイリスとにみちびかれた人間の代表だった。れっきとした町人だが、いずれも妻にだまされた亭主たち。ヴィーナスが妻の情熱をやたらにあふり立てるので、苦情をいいに神々の頭のもとへ参上したのだ。あわれっぽい調子のコーラスがはじまる。ときどき跡切れるその間がいかにも意味深長で、満場大よろこびだ。

「コキュのコーラス、コキュのコーラス」という文句が場内をひとめぐりする。それはしばらく消えなかった。「アンコール」の声がかかったのだ。歌っている連中はみなおかしな顔をしている。妻を寝とられて当然といった容顔だ。なかでもひとりの太った男は、お月さんみたいな円い顔をしている。そのうちヴァルカンが憤然としてやってきて、三日前に逃げた妻を返せと要求する。ふたたびコーラスになり、コキュの神ヴァルカンに嘆願する。ヴァルカンを演ずるのはフォンタン。品はよくないが一風変わった才能をもつ喜劇俳優で、村の鍛冶屋のようにやたらに腰をふる。燃えるような赤いかつら。むき出しの両腕に、矢の突きささったハートのいれずみ。だれか女の客が思わずさけぶ。「まあ、いやらしい」女たちがどっと笑って拍手する。

つぎの場面はきりがなかった。ジュビターがあざむかれた亭主たちの嘆願書を提出するため、のろのろと神々の会議をまははじめる。ナナは現われない！ 幕の下りるまでナナを出さない気なのか？ 何度も期待を裏切られて、観客はついに腹を立てはじめた。私語が生じる。「こりやまずい」ミニオンが顔をかがやかせてシュタイネルにいう。

「騒動もあがりますぜ！」

そのとき舞台の奥の雲が割れて、ヴィーナスがあらわれた。ナナだ。十八にしては非常に大柄な、たくましい体格をしている。白い寛衣の女神姿、ほどこいて肩の上にあっさり垂らした長い金髪。観客に笑いかけながら、落着きはらってフットライトのほうへ降りてくると、アリアを歌いはじめた。

夕べ、ヴィーナスのさまようとき……

つぎの歌詞にさしかかると、観客は顔を見合わせた。ふざけているのか？ ボルドナーヴになにか魂胆でもあるのか？ こんなでたらめで調子はずれの声はこれまできいたことがない。支配人の言葉どおり、まったくのがらがら声だ。それに演技ひとつ知らない。全身をゆさぶりながら両手を前へ突出す。不恰好で品がない。「どうした！」「どうした！」はや平土間や大衆席から野次がとび、口笛が鳴りはじめる。そのとき、オーケストラ席から、声変りしかなかった声がどなった。

「いいぞ！」

満場の視線がそのほうへそそがれる。例の、さば中学生みたいなかわいい少年だ。ナナの姿にきれいな眼をかつと見開き、プロンド色の顔をほてらせている。見られているのに気づくと、彼は思わずどなったのを恥じて真赤になった。となりのダグネは微笑をうかべて少年をじろじろながめた。観客はあっけにとられ、口笛をならすことも忘れて笑っている。一方、白手袋の青年たちもまた、ナナの身体の線に魅了され、うっとりとなって拍手喝采した。

「そうだ、いいぞ！」

場内の笑いを見て、ナナも笑いはじめた。笑声がさらにわきおこる。とにかくおもしろいやつだ、あの美人は。笑うと、あこに小さなえくぼができる。彼女は臆するところなく、なれなれしげな様子で待っている。たちまち観客にとけこみ、ウィンクしながら「あたしには、こればちの才能もないのよ。でもそんなこと問題じゃない。べつなものがあるんだから」と自分からいっているようだ。そして指揮者にむかって、さあ、いこう、おじさん！ といわんばかりの身ぶりを示すと、二節目を歌いはじめた。

真夜中に通りゆくはヴィーナス……

相変らずのしゃがれ声だ。だが今度はうまく観客のつばを押さえたので、ときどきかるい戦慄がはしった。ナナは笑いつづけている。ぬれたような小さな赤い唇、きらきら光る青く澄んだ大きなひとみ。少し力をいれて歌う個所にさしかかると、歓喜に鼻がそりかえる、バラ色の小鼻がびくびくうごめく、頬がぱっと赤らむ。いぜん身体をゆさぶりつづけている。それしかできないのだ。男たちはいまだではそれを下品に思うどころか、熱心にオペラグラスをのぞいている。その節が終ると、声が全然出なくなった。とても最後までやれそうにない。だがナナはいささかも動ぜず、腰をひとふりした。薄い衣のしたに丸い線がくつきりとあらわれる。上体を倒し、のどもとをそりかえらせて両腕をさしのべる。場内がどっとわく。彼女はさっとむきをかえると、赤茶けた髪がもじゃもじゃと生えている首すじを見せながら、舞台の奥へのはって行った。嵐のような拍手喝采。

その幕のおわりはさらにつまらなかつた。ヴァルカンがヴィーナスの横っ面を張ろうとする。神々が会議を開き、だまされた亭主たちの

訴えをききいれる前に、まず地上に調査に出かけることにきまる。そのときディヤヌがヴィーナスとマルスのかわす愛の言葉をききつけて、旅行中、ふたりから目をはなきぬと誓う。つぎのような場面もあった。十二歳のいたずら娘が演ずるキュービッドが鼻の穴に指をつつ

こみ、泣きそうな声でどんな質問にも「はい、ママ……いいえ、ママ」とこたえる。するとジュピターが、腹を立てた先生みたいなこわい顔をして、キュービッドを暗い小部屋にとじこめ、「愛する」という動詞の変化を二十回もくりかえさせる。フィナーレはいくぶんもちなおし、コーラスを一座のものとオーケストラがみごとに演じた。だが幕がおけると、アンコールをねらうサクラの努力もむなしく、観客はいつせいに立ち上り、はやドアのほうへ動きはじめた。

人々は椅子の列のあいだに押しこめられ、足ふみしたり押し合ったりしながら印象を語りあっている。いうことはみなおなじだ。

「ばからしい」

ある批評家は、内容をぐつとちぢめなければなるまいという。しかし芝居などはどうでもよかった、どこへいってもナナの噂でもちきりだ。早く席を立ったフォシュリーとラ・ファロワーズは、オーケストラ席の通路でシュタイネルとミニオンに出会った。ガス燈に照らされた坑道のように狭苦しいこの通路は、息がつまりそうだった。彼らは右側の階段の下の方に、ちよつと立ちどまっていた。そこは手すりのカーブで雑沓からさえぎられている。大衆席の客がどたとどと降りてゆく。通りすぎる燕尾服の波。一方では、ひとりの案内係が、外套を積みあげた椅子を人波から守ろうと必死になっている。

「あの女なら知ってるよ！」シュタイネルはフォシュリーに気づくとすぐさげんだ。「どこかで会ったお婆えがある……カジノでだったかな。抱きおこされてた。べろんべろんに酔っぱらってたね」

「ぼくははつきり覚えてませんがね。あなたと同じで、たしかに会ったことはあるけど……」

そこで声をひそめて笑いながら、

「トリコンの店ででしょう、たぶん」

「よくもあんなけがらわしい所で！」ミニオンが憤慨の面持ちで、「まったく胸がわるくなるよ、観客が為体のしれぬ淫売をあんなに歓迎するなんて。このぶんじゃ、そのうち劇場にはまともな女はいなくなる……ぼくもしまいにはローズに舞台上立つことを禁ずるよ」

フォシュリーは思わず苦笑をうかべた。階段を降りるドタ靴の音はまだつづいている。ハンチングをかぶった小男がひっぱるような声でいう。

「いやあ、まったくよく肉がついてるなあ！ 食ったらさぞうまかうな」

通路では、髪をこでちぢらせ、折襟のきちんとした身なりの青年が言いあらそっている。一方が理由ものべずにただ「いやらしい！ いやらしい！」とくり返せば、相手もまた問答無用といった態度で「すばらしい！ すばらしい！」と応酬している。

ラ・ファロワーズはナナをじつにすばらしいと思った。が、声をよくしたらもつとすばらしくなるだろうといっただけだった。すると、もう話には耳をかたむけていなかったシュタイネルが、はっと目をさましたようだった。だがもうすこし待ってみなければわからない。たぶん、これからの幕は惨澹たる結果におわるだろう。なるほど観客はよろこんだ。が、まだ魅了されるところまでいってはいない。ミニオンは、芝居はこの調子でだらだらと続くにきまっているといった。そしてフォシュリーとラ・ファロワーズがそばを離れて休憩室へ出て行ったので、シュタイネルの腕を取り、その肩のしかかるようにして